



ねっとわあく

特集

自立

いま「パラサイト・シングル」を考える
子どもには苦勞を、親は生きがいを

自立した若者を育てる
親は過保護を断とう
東京学芸大学教育学部助教授 山田昌弘さん 2



海外親子事情 アメリカ 7



海外親子事情 中国 6



信頼感から育っていく自立
家庭も仕事も重さは同じ 4



- あなたの隣のこんな人 8
- 動物たちの子育て事情 10
- パラサイトされるぞーチェック 11
- 語ってねっと いいオトコになろう! 12
- 編集員うら話

「自立した若者を育てる 親は過保護を断とう」

東京学芸大学教育学部助教授 やま だ まさひろ 山田昌弘さん

自立 いま「パラサイト・シングル」を考える 子どもには苦労を、親は生きがいを

未婚化、晩婚化、少子化が問題となっている現在、私たちの親子関係に変化が現れています。その一つである「パラサイト・シングル」を生み出す親たちの背景から、親と子の自立のあり方を探っていきます。

「グル」が増えています。

こうして、親と同居する未婚者は、日本の中で最も豊かな層になっています。

最近の日本では、成人になっても親と同居しつづけ、優雅な生活をする独身者が急増しています。一方、子どもを居候させつづけ、子どもの豊かさを楽しんでいる親も多く見られます。流行語にもなっている「パラサイト・シングル」の名付け親、東京学芸大学助教授 山田昌弘さんを訪ね、お話をうかがいました。

豊かさの落とし子

3、40年前の日本の若者は、就職して給料をもらうと全部親に渡して家計から小遣いをもらっていました。今は、せいぜい2万円くらいの食いぶちを入れて、メイド（母親）、食事、風呂付の生活をさせてもらい、給料は、デートしたり、海外旅行に行ったり、車やブランドものを買うという生活をしている若者が多く見られます。さらに、結婚できずにいる「パラサイト・シン

グル」が増えています。こうして、親と同居する未婚者は、日本の中で最も豊かな層になっています。高度成長と年功序列の時代を生きてきた、1940—50年生まれは、現代の若者の親世代です。人並みに学校を卒業させてあげることが、親のつとめという時代に育ち、経済の高度成長と構造転換が、豊かな結婚生活を支えました。彼らの多くは、親以上の学歴をもち、親以上の生活ができました。こうして、より豊かな生活することが人生の目的となりました。

しかし、親となった彼らの価値観で「子どもが、よりよい暮らしをすること」のみに目的をもって育ててしまうと、子どもはそのプレッシャーに押しつぶされて反抗するか、堂々とパラサイトするかのどちらかになるでしょう。親が子どもにしてあげることの標準が全体として、インフレ状態になってきています。経済的に余裕のない親までが、無理をして子どもに豊かさを与えようとする。こうした背景が、分不相応に経済的・生活水準が高い「パラサイト・シングル」を生み出しているのです。

なぜ依存しあうのか

既に豊かな「パラサイト・シングル」が、もつ夢は、非現実的なものならざるを得ません。昔と違って、出会いが多いからたくさん異性を身近に知ることになります。自分が、「ステキ」と思う人には、恋人がいて、両方が、「ステキ」と思う二人というのは、相当もてる層にしか存在しません。

また、「サラリーマン—専業主婦」の組み合わせで、中流の生活を送るというのも不況下では難しい現実です。

さらに、今の生活が豊かで、楽で、好きなことができる「いいとこ取りの生活」を既に持っている「パラサイト・シングル」に、苦労の覚悟を持って、自立した生活や結婚をすることなどできるでしょうか。「パラサイト・シングル」が、結婚や子育てに夢を抱いていないわけではなく、実現不可能な都合のよい夢を抱いているから、結婚できないのでしよう。子どもに何かをしてあげること、楽をさせ



プロフィール

山田昌弘

1957年東京都生まれ。家族社会学、感情社会学、ジェンダー論を専門としながら親子関係、結婚問題、高齢者介護、家族の愛情など幅広い領域にわたり研究を行っている。著書に『近代家族のゆくえ』(新曜社)、『結婚の社会学』(丸善ライブラリー)、『家族のリストラクチャリング』(新曜社)ほか多数

もたれあっていることに気付かないことが問題と山田さん

ること、物を買ってあげることが、親の愛情の証であるという親の感覚に対して、子どもは、その親の弱みにつけこんできます。「同居してあげてあげる」「お母さんの作ったご飯を食べてあげている」という感覚で子どもたちは、堂々とパラサイトし続けます。

要するに、同居することがいけないのではなく、例えば、援助とか互助とかいう意識もなく、ただだとパラサイトしつづけることが問題なのです。子どもの経済的依存と親の精神的依存の交換関係を築いてしまっているのです。過剰な援助は、子どもの自立を遅らせることになります。

未婚者の意識の変化が、未婚化の要因のようには言われますが、実は日本の経済の変化が、未婚化に拍車をかけています。低成長経済が「パラサイト・シングル」を生み出し、未婚化、晩婚化、少子化といった現象の原因のひとつになっています。

これからの親子関係のヒント

成人してもなお、親と同居しつづけて、自分の働き以上の豊かな生活を望む若者たちが担う日本の未来に、夢や希望は見えません。

「パラサイト・シングル」の問題は、寄りかかるといふ行為だけではなく、先が見えないという点が最大の問題です。将来の社会を自分たちが作っていくという自立した考え方をもたせることは重要です。

それには、親が、子どもの援助を少しずつ少なくしていき、子どもに当たりまえの苦労をさせる必要があります。子どもが小さいう

ちから、我が家のルールをきちんと作って、掃除や洗濯などの家事分担をさせていかなければ、ずるずると寄りかかりつづけられるだけです。「勉強しているから、いいんだ」という発想は、やがて「仕事をしているからいいんだ」という論理になっていきます。

もう一つは、親が子ども以外の自分の生きがいを見つけることです。もちろん、子どもの自立を促す制度の充実(支援制度・税制など)を同時進行で社会が行っていくべきでしょう。

* * * * *

「成人しているのに、自分の働き以上の生活をしてはいけない」。家族社会学・感情社会学がご専門の山田昌弘さんが、そうお話になったとき、当たり前のことなのにハツとしてしまいました。

なぜ、私たちは、子どもたちにそう言えなくなってしまったのでしょうか。少し前の日本の親たちは、よく口にしていたように思います。

子どもに対し、「豊かさ」という愛情を注ぎ続ける親が多い今、親自身の資質が大きく問われているのではないのでしょうか。

パラサイト・シングルとは

成人した後も親元に同居するなどし、家事を親に任せ、レジャー、旅行、ブランドものの購入などを楽しむ豊かな生活をしている独身の男女。山田さんが名付け親。

信頼感から育っていく自立 家庭も仕事も重さは同じ

静岡市

加藤 一郎さん

加藤のぶ江さん

仕事以外にも目を向ける生き方

仕事の分担は一郎さんが営業、のぶ江さんが経理全般。二男一女を育て、今も現役で頑張っています。仕事のかたわら、一郎さんは17歳から始めた柔道を今日まで続け、柔道の静岡市の会長等を歴任、現在はスポーツクラブで柔道の指導をしています。

親子のもたれ合った生き方が社会現象として取り上げられている中、ほどよい関係をづくり、保ち続けている親子があります。その秘訣は何か？疑問を解く鍵を探していた私たちに加藤ご夫妻は快く応じてくださいました。

のぶ江さんは子育てをしていたころ、末の娘が3歳になったら運転免許を取ろう、幼稚園に上がったらいになるものを見つけようと心に決めていました。そして、男女できて、しかも高齢になっても続けられる社



おしゃれな3階建てのショールームはお二人の“本業”の場

交ダンスをはじめました。週に1回のストレス解消のレベルから持ち前の熱心さでプロになり、今では店の隣にダンスホールを作り毎日教えるまでになりました。

夫は柔道、妻は社交ダンスを楽しんでいる間に店が潰れては話にならないと、家業にも精を出し、創業1代にして(株)マルカ加藤家具に成長させたのです。「仕事と趣味」このバランスが厳しい時代を生き抜く智慧につながっているようです。

自立した子どもたち

長男は家業を継ぐように言われたわけではないのに、愛知県の家具店で修行し、インテリアコーディネーターの全国大会でグランプリを受賞、現在インテリアショップ「クラシス」の店長です。

二男も自分で進路を決め、東京の調理師専



生きがいを持つお二人。楽しい話が多く、笑みがこぼれます

門学校を卒業。飲食店に勤めた後、静岡に戻り静岡大学で学びました。そして、現在は加藤家具の営業の中心となり全国を飛びまわる毎日です。趣味にも力を発揮し、川柳の世界では「鯉」のペンネームで新聞の川柳欄の常連です。

長女は東京のヘアメイクの学校を卒業後、東京の専門店で厳しい生活を10年間続け、ヘアメイクデザイナーとして独り立ちしました。現在は子育てを主に、仕事は従の生活をして

います。
このように3人も自分が選んだ道で自立をしています。

強制しない子育て

「人は強制されるとかえってやりたくなくなるもの。勉強は親にしなさいと言われてくるものではないと思ってきましたので、3人の子どもたちにも言ったことはありません。その点では不教育ママでした。姑にはずいぶん助けられました。子どもの送り迎えや弁当づくりとか。でもそれ以外できることは何でもしました。“子育ては親がするもの”——これが原則です」。のお江さんは、日曜日になるとよく子どもをプールに連れていきました。忙しい合間のスキンシップはとても大切なものでした。

一方、一郎さんは「スポーツの中では柔道が一番と思っていますが、長男はテニスだったし、二男はちよつと柔道をやりましたかね。向き不向きがありますから、親が好きだからといって無理にさせようとは思いませんでした」。

「強制してはいけない」。二人の一致した考え方でした。

互いに認め合う大切さ

「夫を尊敬しています。同じ先生でも柔道の生徒さんや親御さんが夫に言う『先生』と、ダンスの生徒さんが私に対して言う『先生』とは先生の中身が違います」。こう語る妻について一郎さんは「(妻は)何でも真剣に取り組みます。趣味が趣味に終わらないで実益に結びつく、これはすごいと思います」。お互いが認め合い思いやる心を持っているのです。

「姑は細かいことは言わない人でした。姑の明治大正と私どもの昭和と子どもたちの平成とは時代が違います。それぞれの時代に合った生活形態が、また結婚や夫婦の在り方、子どもが育つ方があると思います。若い人は私たちが気付かない良いところをたくさん持っています。子どもたちを信頼していませんから余計なことは言いません。でもヘルプの必要があればいつでも手助けはしたいと思っています。一番大切なことはそれぞれの夫婦が仲良しなことですよ」とのお江さん。

* * * * *

仕事をすべて子どもたちに任せ、ダンスを教えることもできなくなったらダンスホールのおばあちゃんと呼ばれてのんびり暮らしたいのお江さん。柔道の先生を続けていきたい一郎さん。

それぞれの輝きを持ちながら、思いやりの二人三脚はまだまだ続きます。

何かを強制されたり押しつけられたことはほとんどありません。



「愛情不足を感じたことはありませんでしたが、かなりの放任主義だったと思います。だから親子がそれぞれ信頼の中にも自立した考えを持てるようになったのではないのでしょうか」

長男 芳浩さん(中)